鼎談「沖縄研究」への展望

「理論」と「実証」の植民地的配分を越えて

土井智義／徳田匡／成定洋子
司会…井上間従文

井上　今回の特集で私が立てた問いは、様々なディシプリンに散らばり沖縄を研究する人々たちの間で、植民地的差異を土台とした知の分業化がされており、この分業化がヒエラキカルな人種化、民族化、ジェンダー化の構造を追認してしまっているのではないか、というものです。

一方では自らを「非現地」として自己画定する研究者たちが、自らを「現地」として自己画定する研究者たちの語りを「経験」の在り処として措定する、そして前者が後者のような「現地」の「表象・代表」たらんとする人たちが言語化できていないが、しかしそこに潜んでいるであろう揺らぎや亀裂を読み取る、といった手法があります。ドゥルーズなどの情動概念がポストコロニアルなテクスト読解において導入される中で、主体にとって過剰であるはずの情動が、馴れ合い、憐憫、同情といったまさに主体間の感情として、陳腐化している感も覚えます。こうした情動読解の間主観的図式への横滑りにおいて、旧来からの「理論」と「経験」いう二項対立が、これまた旧来からの人種化の指標（「西洋」と「残余」）を反復するかたちで消費されているのではないでしょうか。

他方沖縄においては研究者、大学院生、一部の学部生、そして芸術表現や文化的アクティビズムなどに関わる一定数の人達がフーコーやバトラーなどの思考を自らの重要な語彙の一部として活用しながら沖縄内外を規定する人種やジェンダーのあり方、それらに依拠するトランスナショナルな軍

事編成、さらには文化資本の枠組みなどを批判している事実は看過できないでしょう。またこうした理論的な沖縄研究は、阿波根昌鴻、岡本恵徳、清田政信といった人たちの思想や表現を、現在において再読解する作業とも並行して発展してきたように思います。いわゆる「西洋」を空間的起源と措定しないかたちで思考の共振、翻訳、分有の痕跡そのものが「西洋」と「残余」という図式の只中に外部を描き続ける過程、とでも言えるでしょうか。

しかし、こうした沖縄における理論的沖縄研究の動きを捨象した上で、「現地」という閉域化された形象の「表象者・代表者」を自認するある種の人々の反理論的かつ素朴な経験主義的言辞に憐憫的な迎合を示すことで「非現地」知識人としての同一性を担保しようとする人々もいるように思われます。こうした「非現地」と「現地」の知識人たちのヒエラキカルな知的分業制は、沖縄を権力の効果としてではなく、権力が抑圧する実体として措定しつづける限りにおいて、ネーション形態が依拠する家父長制、ローカル・ステート形態が媒介する資本制、インターステートなシステムとして機能する米軍の覇権などへの有効な批判的視座を提示できていません。

今日はこの、空間化・領土化された表象としての狭義の沖縄を生産すると同時に、その表象において不可視化される帝国的編成でのジェンダー化や人種化といったプロセスについて歴史的調査と理論的思考の双方から問うてこられた三名の研究者の方たちをお招きしました。みなさんのこれまでの研究の成果や蓄積を活かしたかたちで、このように「沖縄研究」という場において、「経験・実証」と「理論」が人種化の格子に沿って分離されてしまう事態をどう乗り越えていけるのか、また、「経験主義的・実証主義的」諸カテゴリーに依拠しながらそれを再生産する権力のあり方を問題視するための理論的思考のあり方などについてもお話しいただければと思います。またみなさんの「理論」の水脈としての資料、言葉、人との出会い、関わりなどについてもお話しを伺えればと思います。

一　「沖縄研究」のアクチュアリティ
――メソドロジカル・ナショナリズムを越えて

土井　私は、研究テーマとして、沖縄近現代史を対象とする歴史社会学を学んでいます。井上さんがおっしゃったようにカテゴリーの歴史的な変遷というか、その構成されるあり方と言うものを、史実の確認を通して問うていくということを目指して研究をしたいと思っています。その中でも、特に戦後の沖縄を生きた／生きている人びとの、在留登録や強制送還の問題、参政権の制限など、法的処遇の差配に連動する人的分離に関わる制度史に焦点を当てて考えようとしています。もう一つ、大きな枠で言いましたら、諸国家、複数の国家の編成というものと、先ほどの人的分離において現働する諸主体の編成というものの関係性の考察ということになります。要するに何がしたいかと言いますと、空間とか人というものが、どのように相互依存的な断片に分離され制度化されるのかということを跡づけると同時に、その制度がどのように矛盾

をきたし、また再編されていくのかという問題を考えたいと思っています。僕自身がこういうテーマに辿りついたきっかけの一つには、この十数年来、沖縄をめぐる言論で、批判的に向き合わないといけないと思っていることなのですが、米軍基地問題に対して「県外」とか「国外」とか様々な言い方で、在沖米軍基地の「移設」を求めるという対案主義の問題があります。米国の世界規模での覇権的な軍事力の展開のうち、その局所的な現象として日米安保体制において共犯的に正当化され維持されている米軍基地の存在を、日本国内でその「負担」、その配分を均質化させるという議論について批判すべきだと考えています。そしてもう一つは、沖縄を含めた「日本」の言論空間において、発言者の「ルーツ」とか居住歴などの差異を超えて生産されている、沖縄社会でよくスラングとして言われている「ナイチャー」（「内地の者」という意味で、おおよそ、人の容姿・苗字・訛りなどから推定される形象）とされる人々に対する「仕事を奪う」とかいう排外主義の問題。そういう沖縄に生きる特定の人びとにとって死活問題となり得る人的分離の暴力的な再編に、批判的に向き合いたいということがあります。こうした言論というものが登場して、普及して、正当化されるあり方というものの歴史的な条件とその系譜を問いたいがために、先ほどの研究テーマを設定しているんだと思っています。より具体的な研究内容を言いますと、米国統治期の「外国人」に相当する「非琉球人」（琉球政府の認定する「沖縄県」籍をもつ「琉球住民」と、「米軍要員」以外の人びと）の管理体制を取り上げ、米国統治期の「琉球列島」における諸主体編成、つまり「米軍要員」／米国統治下での市民権の主体である「琉球住民」／両者以外の「非琉球人」という市民権なき主体、という三項からなる法的地位にかかわる主体編成というのが、基地と住民社会との空間的な分離の編制と連動するかたちでどういう歴史的展開の中で作られていったのかというのを、特に日本国籍の「非琉球人」に着目して研究をしています。

徳田　徳田匡です。僕の場合も土井さんと同じように大きな枠組みとしては歴史社会学に属しています。研究対象は、近現代の沖縄史が専門です。沖縄の内部の主体化が表出していくような機制と、それらが日米の軍事同盟とどういう関係があるかということを、大きなテーマとして持っています。その中で非常に気になるのは、「沖縄」というアイデンティティという形で語られてきたものが、どういう制度あるいは管理の中で枠付けられてきたのか。これは占領下の沖縄におけるいわば人口をどう管理していくかという問題と繋がっていると思います。それだけではなく、戦前日本の帝国主義の中で出てきた問題が、戦後もそして施政返還後も、人種主義的なものを引きずりながら、国家にとって統治されるものとしての人口として、経済的な形での人口として出てくるだろうということです。それを歴史的にみていく上で重要なのは、米軍や日本国家を強い権力を持った形で捉えて、沖縄の社会を免罪していくような形で沖縄の社会をみるのではなくて、どのように日米沖の三者がこの占領体制を作っていってしまったのか、あるいはそのような回路の中にどのように人々が巻き込まれていった

のかということです。

成定　成定洋子と申します。よろしくお願いします。お二人が直截的な形で占領体制を問う、あるいは、その占領に関わることみておられるのに対し、私は、その占領において、どういう形でジェンダーというものが編成されてきたのであるかとか、その文化表象とか文化変容というものがどのような形で捉えられてきたのかということを、文化人類学やジェンダー論の立場から行ってきました。自分は、沖縄をめぐり、特にジェンダーやセクシュアリティに関わる表象というものが大きな意味を持っているのではないかという立場から考えていきたいというのが第一にあって、沖縄をめぐるジェンダーというものが出てきた時に、それが本質主義化された形で語られるのはなぜなのだろうかということを問いたいと思っています。土地が収用され、基地ができて、コミュニティに関わる「文化」が変容していったり、人々のジェンダーやセクシュアリティ関係性といったものが変容していくことに、「沖縄の女性」と言われる人達が取り組む、或いは問題化していくという時に、そのこと自体が本質化されながら、同時に、抵抗の主体として持ち上げられるということを一緒に考えていきたいと考えています。今は、具体的には、基地の変容に関係する「歓楽街」がどのように変容しているのか、その変容に関わる言説が、どのようにセクシュアリティ、ジェンダー、セックス、家族、或いは労働に関わる概念とともに、折衝しながら変化しているのかというのを見ていこうとしています。

井上　では、こうした問題意識に則って、みなさんそれぞれがこれまでに書いてきたこと、行ったリサーチ、そして今後考えていこうとしている問いなどをさらに挙げていただけますか。

土井　僕自身は、現在、米国統治期の出入域管理や「非琉球人」管理についての法的処遇に関する資料を見るということをやっています。そこで、さっき話した問題でもありますが、研究テーマに向き合う契機は、いわゆる基地問題について、「移設」という言い方でなされる対案主義と、社会慣習上言われているいわゆる「ナイチャー」というものを、「日本人」と言い換えて、それである種の反権力的な装いをもち、日本政府批判であるかのように出てきて正当化されるあり方ということを批判的に問いたいという動機で、米国統治期の主体編成をみることで今を考えるヒントを得たいということを考えています。「ナイチャー」という存在に対する排外的な言論というものがどういう風に出てくるのかと考えると、沖縄近現代史の経験の本質主義化というか、その歴史的文書とかに登場する範疇の自然化の問題があるかと思います。例えば、一九〇〇年前後の奈良原知事に代表される「ヤマトゥンチュ」の差別的な態度を引き合いに、現在の在沖の「ナイチャー」への排外を正当化するという態度。あるいは、Aという人種的カテゴリーを表す語彙が、ある時代にはa、bというサブカテゴリーだけを含んでいたけど、別の時代では、a、b、cまで含んで変化しているということがあるが、そうしたことを問わずに薩摩侵入とか「琉球処分」、あるいは社会慣習的に「琉球人」という名称によって差別された歴史から、米国統治期を経た現在の日本政府の「施政権」を介した基地問題までを、

一貫して一つの国民的主体と別のそれとの関係という風に解釈する。その図式によって、戦前期に普及した差別（今でも様々な形であり得ると思いますけど）や基地問題を参照することで「ナイチャー」への排外的な慣習や言論が、ある種抵抗として「排外じゃない」と正当化される。その時に特徴的なのは、やはり単に「沖縄」として自己画定する人が感情を爆発させたというわけではなくて、そういう「沖縄」として自己確定する人と画定しない人との共生産的な関係として出てきているんじゃないかという感想を、様々な雑誌の特集などを見ていて思います（『インパクション』『世界』『未来』など）。「日本」の言論空間では冨山一郎氏と松島泰勝氏らの「琉球独立論」との関係などに典型的に表われているでしょう。その時、米国のヘゲモニーに対する問いの不在とか、あるいは例えば米国を批判的に捉えるとするならば、沖縄とか本土にいるアメリカの人と同定され得る人を排外していいのかという問題を想起することさえない。特にその共生産的な欲望として出てくる排外感情の背後には、井上さんも冒頭で述べていたように「沖縄」と自己画定する人には情動を差配し、だからある種の理論的な思考がなくても仕方ない、それを分析して読むのが「沖縄」と自己画定しない人だという構図が見え隠れする。あるいは「沖縄」と自己画定する人同士でも、そうした主体の差配を通じた分業はできることだと思うんですけども、要するにその排外的な感情というのは、歴史とその諸主体の配置を自然化した上で、それを国民主義的に解釈した時に正当化されているっていうところがあるかと思うんです。そうした在沖の「ナイチャー」とされる人々への排外主義の正当化と、「沖縄」に自己画定するわけではない人の「沖縄」と自己画定する人に対するパターナリスティックな憐憫。さらにそうした姿勢に潜む日本と米国との分離を自明視し、沖縄の状況を米国の帝国的な覇権の中で見るよりも、日本の「国内問題」と見なすあり方を構造化する米国による「非西洋」に対する共犯的な人種主義的政策に支えられた米日沖関係という三重のレイシズム構造に批判的に向き合うことが僕の課題だと思います。その時に諸カテゴリーとか、在沖の「ナイチャー」と呼ばれている人の系譜を考えた時に、一つは、米国統治期に沖縄に生きて「外国人」とされた日本国籍の「非琉球人」の存在が、やはり自分にとってはヒントになると思っています。こういう日本国籍の「非琉球人」めぐる法的処遇を考えるにあたって、要するにそれは指紋押捺や強制送還も含めたいわゆる「外国人」問題なんですけど、例えば、それが戦前からの差別への反発として放置されることがある。これは沖縄の新聞に載っていたんですけど、日本政府の南方連絡事務所（南連）というのが一九五二年にできるのですけど、宮田裕という沖縄総合事務局で働いたことのある方が、その事務分掌の中に「南方地域に滞在する日本国民の保護」という言葉を見つけて、さらに南連についての日本政府答弁に、「本土」に籍をおく者が「不当逮捕、拘留された場合は、米合衆国の機関と協議することができる」が、「琉球住民に対して米軍から弾圧、不当な取り扱いなどがあった場合には、日本政府はこれを取り上げて米国民政府と交渉する権限は与えられていな

い」という文言を確認した。この事実について、彼の解釈として「沖縄差別発言」だという言い方をして、日本政府が米国の沖縄統治に対して協力した事実と同じ流れで在沖の「本土籍者」と「琉球住民」に対する日本政府の処遇の差を捉えています。（『琉球新報』二〇一一年八月二四日）

しかし、ここで抜けているのは、在沖の者が「本土籍者」として日本政府に認められることがどういうことなのかということ。そこで「非琉球人」の問題が出てきますが、日本政府から「本土籍」を認められるということがどの場面で出てくるのかというのを、わかり易く二つに分けます。一つは「非琉球人」が合法的に沖縄で暮らすために在留登録をしなければなりませんが、そのとき南連から「本土籍」という証明をもらう必要がある。もちろん在留登録には指紋押捺があり、在留許可証は常時携帯と官憲への提示義務があります。在留登録違反となると、布令違反となり、場合によっては拘留・罰金・強制送還という三重処罰がありえます。もう一つは強制送還のときで、強制送還というのは誰でも好きなところに勝手に送り出せるわけではなくて、基本的に国籍国に送り返すという原則なので、仮に訛りとか、容姿とか、名前とかで「本土」とされたとしても、それだけで勝手に送り還せるわけではなく、「本土」に送還すべき「本土籍者」という証明がいるわけです。その時、日本政府の「保護」の内実というのは、基本的には米国統治において沖縄に居住する人々をいかに分離するのか、その統治の中で誰を市民権の主体とするのかという戦略に合致していて、それを支える行為でしかない。日本国籍者を含めた「非琉球人」に対する人権侵害は、米国管理の中で琉球政府と日本政府の連携で実施されましたが、「非琉球人」の系譜というか、「本土籍」と認められた人が沖縄でどんな状況で生きたのか、例えば一九六八年まで参政権がないとかということと合わせてみなければならない（もちろん日本国籍がない人は「復帰」してもずっとないままなんですけども）。「本土籍」の意味も「本土」の場合と沖縄の場合で違うとか、そこに日本政府とか琉球政府とか米国政府や各社会の言論がどう関わっているかということを、やはり歴史の中で見なければいけない。一例をあげると、いわゆる沖縄の復帰運動と「本土」の返還運動の中で呼応された「沖縄の日本人」と「本土の日本人」という「日本人」と自己画定する国民主義的な社会運動（一定の抵抗力は確実にありましたが）の中で、じゃあ参政権もない状況の中で生きていた日本国籍の「非琉球人」とされた人びとの苦境が取り上げられたかと言ったら、僕はその痕跡を見つけるのがかなり難しいと思います。そうした当時の「日本人」の中に「本土籍者」の「非琉球人」が入っていたかどうかというのを歴史的に検討しなければいけない。

ちょっと戻りまして、なぜ現代の沖縄における排外的な言論というのが、日本の言論空間の「左派」と分類され得る人たちの中でも受容されてしまうのか、そこで正当化されてしまうのかということを考えると、単純に沖縄をめぐる言論の状況を構成する四つの空間的なスケールというのを検討しなければいけないと思っています。一つは、戦前期の「琉球処分」なるものを経て、「大日本帝国」の旧「内地」とされた旧沖

土井智義

縄県施政域と旧鹿児島県の大島郡、あとは旧沖縄県に属しながら製糖企業が統治した大東諸島、この三つの施政領域を米国が the Ryukyu Islands、「琉球列島」として一つの植民地的国家（colonial state）へと再編し、そこから奄美群島が返還され、現在の沖縄県に相当する施政領域を作っていき、施政権返還によって、現沖縄県になっていくという米国覇権のなかでの空間化というか、その局所的なスケールにおいてどうやって人々が生きてきたかということ。二つ目に、戦後日本の国内化されたスケール、それは現在の沖縄を含むわけですが……。三つ目ですが、大日本帝国が崩壊した後、当然この地域から帝国が消滅したわけではなく、まぁ米軍の軍域を見ればすぐにわかりますけれども、韓国、日本、「琉球列島」、フィリピン、タイ、ミクロネシア、小笠原とかも含みますが（アメリカはそこだけではないですけど）、そういうアメリカの帝国的な覇権の中で、人がどのように分離されつつ配置されていったのかというスケール。最後に、これはアメリカ自体をも一つの局所的な現働化として、酒井直樹氏らが述べているような、実体化するわけではないけれども、諸国家の状況を統御するグローバルな主権という地球規模の潜在的な動性のスケール。こうした四つのスケールの中で、沖縄という局所的な空間が構成されていったと考えなければならないと思います。だが、沖縄で生産される言論を含め、「日本」の言論状況というのは、二つ目の「日本」の国内化されたスケールで均質的に捉えてしまっている。たしかに、沖縄社会の国民的な主体、沖縄社会の人種的な徴候において無徴の主体というものが、「日本」の国内化されたスケールでは主流でないことは事実です。だが、「日本」国内のスケールだけで均質的に考えると、沖縄社会なるもの、「琉球列島」から日本の施政権に再編された「沖縄」という空間の編制と、そこで人々がいかに分離されてきたのかという歴史を完全にすっ飛ばしてしまい、例えば返還前の「非琉球人」の問題が見えにくくなってしまっているし、「ナイチャー」と言われている人々が単純に日本政府と結びつけられて排外が正当化されているのではないかと考えています。要は、戦後「日本」というスケールで沖縄に生きる人びとが周縁化されていることと、沖縄社会でマジョリティとして人口が構成されるあり方が短絡され、前者によって後者への問いが抹消されるという認識的暴力があるということ。やはり「琉球列島」から現在の「沖縄県」へというスケールと、戦後の「日本国」というスケールと、アメリカの帝国的編制というスケールと、グローバルな主権というのが、この沖縄という局所的な場でどういう風に絡み合っているのかを考えたいと思っています。平たく言いましたら、現在の沖縄の歴史的に形成された被抑圧的な状況と、沖縄社会の中や、沖縄

をめぐる言論の中で登場する排外主義というのを結びつけて、同時に問うあり方というのを求めたいんだと思っています。

井上　土井さんが今あげてくださった四つの空間的スケールが異なる時間のスパンと規模を持ちながらも、相互嵌入し、かつ相互構成的であるというご指摘は、一方ではトランスナショナルなネットワーク内を循環する米軍という存在のあり方、他方では現在までの資本主義においてある人々を生かし、その人々の従属的主体性を再生産し、またある別の人々を死ぬにまかせておくといういわゆる生政治の状況とも関係があるようですね。徳田さんのこれまでの研究とも接点があるような気がします。

徳田　僕は、ベトナム戦争期における米軍内での反戦米兵の話と、それから沖縄における原子力発電の導入のことについて、二つ論文として書きました。いま取り組んでいるのが、沖縄で一九五六年に出来てすぐに廃止された優生保護法の問題について。そして戦前期から戦後初期にかけて活躍した言論人であった銚平名智太郎の内部にある人種主義について。もう一つは、近代化論の中にあった沖縄の言説空間について考えています。例えば、銚平名智太郎が一九四六年に書いた『沖縄民族読本』という本があります。その中で、彼は「沖縄県人」という文字にウチナンチュというルビをふります。彼の中でウチナンチュというものが出来てくるのは、沖縄の人が資本主義によって主体化されていくと同時に、日本という国民国家に同化していく歴史的な過程そのものが、人種あるいは民族として表象されるわけです。つまり彼にとって歴史が自然化されて初めて人種が確定する。それは可変的であると同時に本質的でもあるというか、要するに血は変わらないけれども、日本人に近づくことによって強化されていく、良化していくことで我々性が確定していくという風に言います。教育され馴致されることが可能な身体というものを通じて民族性が立ち上がっていくというわけです。彼は歴史を語りながら、その歴史を一つの人種として自然化しながら「沖縄」という主体を立ち上げていくわけです。優生学に関しても、統計による人口としての住民の立ち上げがあり、人口増加という危機的状況が認識される。その背後には例えば文化国家の建設、近代化への欲望がある。その経験というのが、沖縄にとっても米軍にとっても統治の有用な経験としてあったと思うわけです。そういう沖縄を確定していく作業が永遠に続くことによって、統治はいくらでも介入する領域を確保できた。それは戦前からの人種的な沖縄の立ち位置、それから戦後の統治の中で確定していく人口としての沖縄が重なり合っていくことだと思います。沖縄の中で沖縄の人達が措定していく人種、人口としての主体性は、同時に占領にとっての管理・統治する対象そのものだったという、そういう二面性がある

徳田匡

と思います。

井上　では、成定さんへと続けていきましょうか。

成定　自分は、修士論文で初めて「沖縄研究」を始めて、「沖縄の女性」というものがどんな風に文化表象として表されてきて、そこにどのようなメカニズムがあるのかということを考えました。具体的には、沖縄の人類学・民俗学的研究の中で女性の霊的、スピリチュアリティの優位性が男性に対して強調される中で主張されてきた「オナリ神」研究というものを、少し批判的にみることによって、「沖縄女性」が文化研究の中で位置づけられてきた枠組みと問題を明らかにしようと思いました。次に、沖縄の女性センターで働いていた時に、金武の杣山訴訟がありまして、これは、金武町の部落内で、均質的とされるコミュニティの中で軍用地料の配分が問題であるということを一部の「女性」側から問いただしたという裁判でした。この訴訟は、二〇〇二年一二月に那覇地裁で始まったんですけれども、当初は外部の支援者がいなかったんですね。恐らく、反基地が前提になっている沖縄の女性運動、特に反戦、反基地、反軍事、性暴力に関わる女性運動に対し、この杣山訴訟では、軍用地料をジェンダー的視点から対等に配当するべきだとしていて、基地の存在自体は認めているように見えるわけです。内部にいろんな力学はある中で、原告が異議申し立てをするわけですが、そこにすぐ支援できる女性運動というのは見えにくい、あるいは具体的には立ち上がりにくかったのかもしれません。ただ、当時、女性センターでは、原告がコミュニティ内外において声を上げたことに、自分たちを重ね合わせて、直接的でないにせよ、応援していた人たちは少なくありませんでした。しかし、この訴訟の原告は、単に、いわゆる「沖縄女性」という文化表象として持ち上げることも難しいし、かと言って反基地運動をしている沖縄女性ではないので、シンシア・エンローさん言うところの「反基地運動をする沖縄女性はすごい」というロジックの中にも入らない、既存の文化論や運動論において非常に難しい立場だったように思われます。それから、当時、働いていた女性センターが関わる「男女共同参画」の課題と問題といいますか、特に雇用問題を周りの人たちと一緒に考えるようになり、その中で、自分の沖縄研究・ジェンダー研究を育ててもらったと思っています。

　現在は、難しいテーマではありますが、沖縄本島の歓楽街の変容をめぐる諸問題をどのように考えてたらいいのかということを、歓楽街の浄化活動を事例に行っています。浄化の過程において、犠牲者である働いている女性達を救うというような言説が出てくる一方で、その人達は借金で困っているわけではなくて、自分のお小遣い稼ぎ的にやっている自立した労働者だから排除しても問題ないという、相反した言説が並存しています。でも、そこには、沖縄をめぐる様々な境界や範疇を作ろうとしたり、或いは壊していくような、色々な問題が含まれていて、「沖縄女性」というものを均質化できないような実態や実践が見え隠れしているのではないか。このような問題意識の背景にあるのは、自省も込めて、沖縄をめぐるジェンダー論における意義と問題です。これまでの沖縄研究の中で、ジェンダーの問題が大きな位置を占めてきて、い

ろんな達成や転換点があったんだけれども、まだ議論していくべき問題もあるのではないかと思っています。第一に、一九八〇年の「トートーメー論争」の中で、当然視、或いは不可視化されてきた性差別というものが、可視化されて社会的に問題化された大きな動きがありました。国際女性会議に、沖縄から参加するということも、同時代的にありましたし、女性運動が高まってきた中でそういうことが起こってきたと思います。二つ目に、研究上においては、沖縄女性史が果たしてきた役割が大きいと思いますけれども、いわゆる「被害者」や「犠牲者」として位置づけられてきた「沖縄女工」「沖縄女性」の存在を、労働者や主体という形で再構築し直したところに大きな意義があったと思います。加えて、少し異なる文脈になりますが、「従軍慰安婦」のことを考えるならば時に、「沖縄女性」も、戦争の「加害者」「加担者」として見ていかなければならないという視点も提示されています。三つ目に、九〇年代後半以降、沖縄をめぐるジェンダーの表象について、批判的に検討する研究が出てきました。例えば、実証研究・理論研究に関わらず、沖縄をめぐるジェンダー研究の中に持ち込まれている、二項対立的な本質主義を問題化していかなければならないという指摘です。

成定洋子

また、これらを踏まえた上で、現在、沖縄研究におけるジェンダー論の限界と課題を、以下の三つに分けて考えたいと思っています。第一に、被害者／客体というものから労働者／抵抗者／加害者／主体のように、理論的な立場の転換が行われたのだけれども、そこに留まる傾向があるように思われます。その背景として二つ目に考えていることは、たとえその研究が「ポスト構造主義」的ジェンダー概念を標榜していたとしても、実際の議論や分析においては、本質主義的に帰着する傾向があるのではないかということです。また、ジェンダー表象の「脱構築」がされながらも——自省しつつ——、「脱構築」後の行方というものが非常に見えにくい、あるいはしっ放しになっているのではないか、ということです。この問題の所在を問う際には、このような傾向を、沖縄研究や沖縄をめぐるジェンダー研究に関わる研究者の「欲望」とともに考える必要があるのではないかと思います。このことは、ある研究が何かを本質主義化しているか、していないかということではなくて、本質主義化のメカニズム自体を問う、つまり、ジェンダー化がどのように起きているのか、そこにどのような意味と効果が生まれているのかということを丁寧に問う作業になるかと思います。ただ、このような作業は、恐らく、占領を問う過程においてこそ、より強い傾向が出る、難しい問題ではないか。こうした背景の中で、自分が今後も含めて研究の方向性として考えているのは、沖縄とジェンダー論をめぐる抵抗論の再考です。そうすることで、沖縄

をめぐるジェンダー・ポリティクス、セクシュアリティ・ポリティクスを従来と異なる形で展望する可能性を見出すことができるのではないかと思っています。沖縄研究をめぐる抵抗のテーマは多岐に渡りますが、まずに考えなければならないのは、「抵抗」という行為・実践、或いは言葉・概念というものが無批判・無意識に美化・ロマン化されていることです。例えば、「抵抗」に関わる主体や客体が、沖縄をめぐる様々な二項対立的本質主義化の構造――男／女であるだとか、米軍／沖縄だとか、日本／沖縄とか――の中に回収されながら再生産されているということがあるかと思います。その背景には、異性愛的な近代家族というものがきっちり立ち上がってきていて、そういうものがジェンダーやセクシュアリティを囲い込んでいるという言論状況があるのではないか。また、それらをベースにしながら、「沖縄女性」の「抵抗」をジェンダー化しつつ、さらに美化・ロマン化するという傾向があるように思います。それはどういうことかと言うと、「沖縄女性」というものをさっき述べたように、主体化すると共に本質主義化してしまう。「ポスト構造主義」的に考えていると主張しつつ、主体化する過程で本質主義化してしまうという隘路があるかと思います。そこに「抵抗」というものを「再発見」したいという研究者の「欲望」があるのではないか、ということですね。「沖縄女性」をめぐる「抵抗」のジェンダー論の再考の必要性がそういう意味であると思うのですが、そのような隘路があるが故の議論を立てることの難しさがあるのではないか。具体的には、基地周辺の歓楽街の浄化をめぐる言説を通して、「売買春」と「沖縄女性」の関係性というものを再考することによって、「沖縄」あるいは「沖縄女性」をめぐる外部と内部というものがどんな風に「沖縄女性問題」あるいは「沖縄ジェンダー問題」として作られていくのかということとともに、先ほど述べた諸問題を違う角度から見ることができるのではないか。さらに、その欲望のありかを本質主義化しない形で議論の俎上にのせることができるのではないかという風に感じています。

二　トランスナショナルな空間においてナショナリティ／ジェンダーを歴史化すること

井上　みなさんのお話しを聞いていますと、確固たる領土として可視化できるわけではない、いわば権力の網目、さらにはそれが要求し定式化するある種の合理性が地球規模で循環する際の実体ならざる「傾向」としての帝国的主体編成がある。そして、その際にそれに抗うというよりは、逆にそれを準拠軸とすることで様々な人々がある特殊化されたアイデンティティを承認されて、引き受けることで、自らそれについて――強いられた状況下において――積極的に言語化することで交換価値を得ようと進んで努力してしまっている状況があるような気がします。レイ・チョウが著書 *Protestant Ethnic and the Spirit of Capitalism* (2002) という著書で述べ、またその題名にも批判精神を込めて述べたところの「プロテストするエスニック（従属）主体と資本主義の精神」が、こうした承認と配分の準拠軸に依拠してしまっているのではないでしょう

か。

今日、各地で「ナショナリティ（国民性・民族性）」の言説が強化されていく事態には、様々な人々が諸ナショナリティのヒエラルカルな承認関係において自己を措定したい、あるいはそれがうまくいかないことへの焦りや恐れがある。そこで帝国のローカル・ステート体制からの、ある集合的な逃走の線が見出せなくなっている状態があるように思います。そこで悪循環のように相互承認・相互形象へと陥っている気がします。こうした状況下で、抑圧「以前」の自己を表象しようとする所謂「抑圧仮説」は今私が帝国的とまずは名指した統治形態とは非常に親和性が高いわけですが、こと制度化された沖縄研究の場においては、これまでまさに言説において前言説的であるという「措定」がなされることでイデオロギーとして物質化されてきたジェンダーやレイス規範を問うためのアルチュセールやバトラーなどの議論が、参照されないばかりか、参照されなくても良い、という状況が作られて来たのでは、と考えます。では「普遍」な文化像や自画像と循環的に相互構成的である「特殊」な文化像や自画像、この悪循環のサイクルへの抵抗の線、それからの逃走の線といったものは、みなさんの研究においてはどのようなものとしてあるのでしょうか。

土井　国家的な権力というものが具体的な身体を構成して、それを作用点・結節点として発動すると先ほど徳田さんがおっしゃっていました。軸からズレた時にはっきりと権力が見える、あるいは個々の人たちの行動が逆照射する権力関係というものがある。たぶんその権力関係の分析を通して批判が出たり、その関係からの離脱ということが生じうるのだと思うのですが、僕の具体的なテーマとしてそうしたズレが見えてくるのは、米軍が退役した後沖縄に残ろうとする場合や、米軍の被保護人、例えば扶養者である米軍人の親が転勤して沖縄から離れる場合などで、この人たちは当然米国統治期においても、米国籍の「非琉球人」という形で在留登録などしなければならなかったのですが、具体的な身体を結節点として作用する権力関係によって展開する米軍のあり方がこのような事例において見えてくるように思えます。ある局面で占領者という主体に配分される身体を本質主義化して、制度や権力関係から離れてこの人はいつでも「占領者だ」と言うのであれば、私たち住民側が、指紋も押して、参政権もない人を「占領者」として名指しかねないような陥穽があります。ズレる過程への着目というのは、僕の研究からすると、米軍という範疇を離れた人達が沖縄あるいは日本で生きることの問題と関わってくる。米軍というのが統計においてinvisibleだと先ほど出ましたが、僕はある時期まで「琉球住民」と「非琉球人」を含めた住民側と米軍との分離を根拠に、米軍が住民社会から超越していると見ていました。今でももちろん米軍は地位協定で国内法の「外国人」管理体制に当てはまらない。それを超越と捉えていたのですが、今はやはりそれは違うと思っています。超越ではなく分離として、歴史的に特定の主体編制において軍として主体化するというか、そこを見なければいけない。その時に、先ほどの複数のスケールを考えたくて、一つは「沖縄」というスケール。二つ目は、大日本帝国じ

ゃない戦後「日本」のスケール。そして、戦後の米国の覇権というスケール。最後の米国覇権のスケールで見た時には、米軍というのは超越ではなくて、コロニアルステートも含めた個々のネーションステートが米国の帝国的な覇権において統御されるなか、「米軍要員」としてその諸ステートに横断的に配置される中で流通し、地元の人たち ―― 資料では“indigenous”とか“native”として出てくる地元の人、それは日本「本土」も含めてなんですけど ―― と分離が維持される中で、明確に軍の人口として構成されることを考えなければいけないと思っています。自分の研究で言えば徳田さんの米兵の軸からズレるという話に共感というか、このような事が言えるのかなと思いました。米軍という存在と、領土化された「国家」における市民権の主体「国民」と、市民権の主体から外れた「外国人」――僕の研究では「非琉球人」――という三項からなる主体編制があります。それと同時にアメリカの帝国的な覇権――最近では帝国的な経済圏という言葉を使って考えたいと思っているのですが――、アメリカの帝国的経済圏において米軍基地という諸領域と諸国家編制（ここには米国本国、日本「本土」、ミクロネシアや「琉球列島」などが入ると思うのですが）、この空間編制というものがあります。このように移動して共在し、時には身分を偽ったりしながら自称する人びとを、特定の主体編制を通じて分離しつつ統御して差配していくあり方と、基地とか日本とか沖縄とかの権力関係の作動域として差異化しつつ統合される諸空間の編制が連動するあり方を考えなければいけないと思っています。僕の場合は「非琉球人」の法的処遇を軸に、空間と人の編制の固有の結節点として物質化される「沖縄社会」というものを考えたい。

井上　ここまでの議論では帝国的権力の作動領域において「沖縄」なる空間化・領土化されたもの表象の可能性の条件が与えられているときに、そこで所与とされる近代化、民族化、ジェンダー化やそれらと不可分の労働力化などの過程やそれらへのミメティックな同一化への欲望から逃れることの必要性が感知されているようですが、では、こうした問題意識を共有する中で、それぞれが互いに問うてみたいテーマや問題意識、歴史的事象などはありますか。

土井　成定さんがおっしゃっていた欲望、「沖縄女性」研究をめぐる欲望との関連性、たぶんこの辺がアン・ローラ・ストーラーが *Race and the Education of Desire: Foucault's History of Sexuality and the Colonial Order of Things* (1995) の第一章で、問題にすべきことは欲望の諸配置 (distributions) だというような言い方をしていて、そこではどうやって白人であるとかヨーロッパ生まれ、現地人、ヨーロッパ女性、現地女性であるとかという形で、主体の「対―形象」的な配分が欲望と関係するのかが問われていたと思います。あるカテゴリー、あるいは「沖縄女性」をめぐるジェンダーの本質主義化のメカニズムなど、研究をめぐる欲望の配置と共起する主体の配置に誰が関わっているのかと考えた時に、「沖縄の女性」や「沖縄」を本質主義化する際、ウチナーンチュ大会とかのように、例えば北米のアジア系という枠に入るだろう「沖縄」系とされる人びとがホームランドを眼差す視点なども検討の対象に

入ってくると思いました。自分も含めて日本語でメインに研究している人達が巻き込まれている欲望の配置のあり方が、どういう状況なのかと考えながら聞きました。

成定　ウチナーンチュ大会についてもう少し詳しく伺えますか。

土井　沖縄で発行される新聞だけの情報なのですが、沖縄のメディアで「世界のウチナーンチュ」みたいなのがよく報道されるのですが、そこでは、沖縄のメディアが求めているであろう北米や南米などの沖縄系の方だと思うのですが、そういう方達の発言としてこっちでアクセスできるものの一部に、彼らの言うところの「ヤマト化」する沖縄に対する違和感が、特に北米やハワイ在住の人びとの「故郷」への眼差しのなかで表明される。また相互的に、例えば南米で県議の方がウチナーロを聞いて、移民先にウチナーロが残っているという言い方によって、それではここ沖縄ではどうなんだろうという形で今の「島くとぅば条例」というものができた経緯があります。「沖縄女性」あるいは「沖縄」を求めるということも、たぶん家族の再構築を通じたジェンダー配置に関わると思いますが、これは日本国内あるいは沖縄県内、あるいは日本語の言論空間だけではなく、これがどんな地球規模の状況で作られているのかなと考えています。

成定　先程の欲望の問題に一つ追加するべきものとして、ジェンダー理論のための事例を沖縄に見出したい、沖縄のネイティブに見出したい「欲望」があると思うんですね。例えば、一九九九年に出版された Susan Sered の *Women of the Sacred Groves: Divine Priestesses of Okinawa* (1999) では、本質主義的なジェンダーに対する反証事例を持つ場所として、沖縄を再発見しようしました。沖縄には、実体的なジェンダーはないということを言って、批判されるわけですが、大切なことは、ジェンダー理論を実証するための事例を沖縄に求めることがどういうことなのかを考えることではないかと思います。「沖縄の女性」は本質主義化もされるし、脱本質主義化もされる。でもそこには同様に理論のために非常に使いやすい存在としてあるのではないか。そこを見ていく必要があるのではないかなと思います。

土井　そこにやっぱり見つけられるべき事例みたいなものが眠っている場所という形で、「沖縄」が見つけられる。そして、「沖縄」と「沖縄でない」ところが分けられる。酒井直樹さんの言うように、特殊主義と一般主義という二項自体が、転移的な欲望の関係の中で異なるものとして分離して表象されることを通して共生産されるものであり、西洋／非西洋、米国／日本のような分離は、一つの権力関係の中での配置であると思います。今の話を伺えば、そういう風に沖縄を事例の貯蔵庫として見なして、理論は書店で買って、資料は公文書館で探すのとは違うテキストへの向き合い方があるのではないかと考えさせられました。

成定　ネイティブの言葉を用いて、インフォーマントとよい「ラポール」を築いた結果としての「情報の正しさ」が強調されるけれども、どの情報においても、文脈的なものがあるにも関わらず、非歴史化された形で、あるインフォーマントが言ったことが採用され、論拠になっていくというところが「沖縄的な場所」としてあるのではな

いか。しかし、それを批判することが難しいのがなぜなのかを考えなければならないのではないか。

徳田　俗っぽい話をすると、九五年のあの事件後に、篠山紀信がアクターズスクールの女の子達の写真集を出したのですが。

井上　いつですか。

徳田　九七年です。九五年の少女暴行事件の直後に、『ＳＰＡ！』で「〈少女としての〉沖縄」という特集（写真・篠山紀信／文・中森明夫、扶桑社、一九九五年一一月二五日）があり、ＳＰＥＥＤなど沖縄アクターズスクールのタレントを出しています。その後それが写真集になりました（『少女たちのオキナワ』写真・篠山紀信／文・林真理子、新潮社、一九九七）。その中で、少女暴行事件における「少女」の流布に対して、林真理子が事件とは別の無垢な沖縄の少女について書いていました。無垢かつ家父長的基盤としての「少女」という身体が傷つけられることと、無傷で健康的な身体として表象することは、どちらも既存のジェンダー規範に立脚している。つまり、「沖縄性」を投影したいという欲望と、それを否定しつつも女性性を保持したいというのは、重なっていると思います。

成定　沖縄における見たい「女性性」というのがあるんですね。こんなに大丈夫なんだよということが商品化された形で提示されていく。

土井　一方で篠山紀信の話のように無垢を見つけ出そうとしたり、他方では癒しとして沖縄が表象されてきたんだと、それに対して「それは違うんだ」と言って、「真の沖縄はこれだ」と憎しみに満ちた発話が出てくる時に、排外的なものがオッケーだとされるのが、ここ十年くらい続いていると思います。一つの個体の中に真なる感情が蓄積されていて、そして、私たちはそこから離れているけれどもそれを読むというような分業構造が絡まりあう。篠山紀信の沖縄の少女を撮るだとか、憎しみの主体やそれを高みから煽る立場にしても、求める「沖縄」なるものを奪い返したいということにおいては共通している、奪還しなければならない、誰かから不当に奪われ、あるいは侵食されていて、奪還しなければならない「沖縄」という。成定さんが研究で空間とか公共圏の話をされていたと思うんですけれども、歓楽街の浄化という動きの中に、ある種奪い返すという衝動、私達の「宜野湾性」なるものの中にある、非合法と言われている売春が行われている地域というものを奪い返したいというところがあると書かれていたと記憶しています。これはよく言われている今のジェントリフィケーションとして公園が貧困層に奪われているから取り返すんだと野宿者排除を正当化されているようなあり方とどのくらい繋がるかわからないのですが、論拠とすべき真なる「沖縄」を措定するあり方には何か奪われているから、何かに侵食されているから奪い返したいというモチベーションがあるかと思います。この衝動を、基地被害などの反発に解消して不問にしてはいけない気がする。

徳田　それは自分達で規範を内面化しながら正しさを追求する市民社会のあり方ではないでしょうか。法に服従するのではなく、自ら物事を正しい方向に持っていく力があるのだという形で表象する。そのように自己表象する人たちにとって国家は相対化さ

れるし、あるいは権力とは違う者として自分たちを自己表象できるという認識がある。

成定　そういうことは、沖縄に関するジェンダー研究にもある気がします。あるべき「沖縄女性」の姿を理念、あるいは理想像として掲げられる一方で、現実的にはトートーメー差別や金武杣山訴訟などがある。けれども、例えば、「ウナイ」という言葉を用いることによって、補塡された位置関係を獲得することができる。そのような言説は、差別の構造を糾弾し問題化するということにおいては構築主義的な立場で取りながらも、しかし「ウナイ」ということによって「沖縄女性」を均質的に本質主義化し、非歴史化してしまうところが、ロジック的につながる気がします。

徳田　権力に対して批判はしているんだけれど、水準としては単に同じ基盤を再生産しているだけっていう。

成定　そうそう。

井上　ウナイについてはどのような定義がなされているのですか？

成定　「ウナイ」という言葉は、一九八五年の第一回「うないフェスティバル」から新たな意味づけを得て、今に至っているように思います。当時のパンフレットには、従来の「うない神」「女きょうだい」という意味に、新しい意味を持たせるような、つまり、男の守り神としてではない、いろいろな自分を個々の女性たちが獲得し、社会を変革していくのだという主張が見えます。ただ、このような新しい意味合いが、その後、金武杣山訴訟の原告団体の自称など、異なる文脈で展開されると同時に、元の意味に還元されていく傾向も見られるように思います。

徳田　感覚的には女性共同体みたいな感じ？

成定　そうです。発話者が（戦略的）本質主義を自認する・しないにかかわらず、「ウナイ」を回帰的に無条件に「よい」集合的なものとして出す傾向があるように思われます。「うないフェスティバル」が三十回目の節目を迎える今年、「ウナイ」をめぐる言説の在り様―例えば、セクシュアリティやジェンダーの多様性に触れつつ、「ウナイ」を集合体として称揚することの意味や背景、効果など―を丁寧に考えていく必要があるように思います。

井上　そしてこうしたジェンダーが文化主義を基盤としたジェンダー像へと回収されていく傾向が、例えば文科省から琉球大学のジェンダー研究プロジェクトなどのような特殊主義・文化主義的であり、従って、非理論的でもあるプロジェクトへの予算投下なども介して強まっているのではないでしょうか。日本政府としてもいわゆる「本質」を非歴史的に措定することで「文化」を固定しながら、いわゆる多文化主義の言説を介して「特殊」とされる従属主体を再生産することは、ステート形態がエスニック・マイノリティを承認した上で幾ばくかの分配を支給することで懐柔していくような政策の動きでもあるわけです。

徳田　文科省は別にこれをやれなんてことは言わないわけですよ。でもこれが出てくるんですよ。

成定　単に本質主義だと批判するのではなく、このような言説をどういう風に再考していくのかっていう道筋、回路を丁寧に作っていく作業をしていかないといけない。また、こういうジェンダー論が沖縄をめぐ

って出てくることを複合差別論とあわせて考えていく必要があると思うんですね。上野千鶴子さんの複合差別論では、様々な差別が複雑に絡み合う状況を、本質主義に陥らない形で議論されていましたが、なぜか沖縄で流用されるときに本質主義化された形になることがあります。そのメカニズムを問いたい。そこに先ほどいったような欲望の構図が関わっているんじゃないか。土井さんや徳田さんの言ったような、取り戻すべき、あるいは補填すべき沖縄女性像というものが想定されているのではないでしょうか。

井上　複合というのは今では本質の束のように理解されてしまっている？

成定　そうですね。

土井　これは今の日本の研究状況全体のなかで見ても沖縄に特殊なことと理解してよいでしょうか？

成定　この複合差別についてはいろんなところで見えると思います。女性の「障がい」をもった人、在日の女性、あるいは部落女性に関しても複合差別と言われているように思います。

井上　本質主義は英語だと当然 essentialism と言いますから、すでに"ism"という接尾語が入っている時点でこれは構築物だ、という含意が単語のなかに含まれていると思います。だから戦略的本質主義などと言われても、それは構築物という含意をすでに内包する本質主義の同語反復という気がしてしまう。また、本質主義が言うところの「本質」とは可変性の土台としての超歴史的に不変なある基体といったものなのでしょうが、それは権力のフィールドそのものを揺るがすようにして遍在する揺らぎや、震えをその基体に対して二次的なものとして縮減してしまうでしょう。戦略というならば、それとは別の戦略が必要でしょう。

それは単純にこの場合には、「沖縄」とそれをめぐる世界を成り立たせている権力のあり方を不可視化することで軍事や資本のあり方を固定する諸編成に抗いつづける事につきるのではないでしょうか。また「戦略」であるという言辞のもとに、普遍に対する特殊という自己画定を選択することができるのは、学問、政治、文化などの領域でそういう名指しを受けるに足る地位にすでに達したか、あるいは達したいという欲望を内面化し、表象の制度内で代表者＝表象者として一般の人たちを指導する場にいたいと願ういわゆる「ネイティブ・エリート」としての自己表象を欲する人たちではないでしょうか。個々人の真摯な思いもあって発せられる「沖縄のために」といった発話が、いつしか「沖縄を代表する」アドレスに転ずるときには、やはり自らと「民衆」と呼ばれる雑多かつ多様な人たちとの位階化と解離を避けがたく露呈する発話になっています。これはインド史研究者のパーサ・チャタジーが言うところの「人民」の様々な政治的欲求を、「ステート」が遡及的に捏造する「ネーション」の妥当性の根拠として単純化して、縮減させてしまうプロセスでもあります。さきほども土井さんが述べたような厳密には実体化しないグローバル主権の根幹を成す軍事と資本の運動にとって不可欠なローカル・ステート形態の合理性の枠へと、人々の政治的欲求の幅が縮減されてしまう……。このときにローカル・ネーション・ステート形態の「表象者＝代表者」たらんとする人は、一

方では陳情のポリティクス以外の政治的欲求を発話することが非常に困難になり、と同時にそうした発話を普段行わない、いわゆるより「一般の」人々に向けてはいらだちを含んだ上から目線などを時に露呈させもします。

土井　先ほど徳田さんが言った市民社会の「自律」、自律的に自己を扱うことができるような主体としてはまっていくみたいなところ。そして、今の表象とか知識人に関して思ったんですけど。少し話を戻しますが、今沖縄のアイデンティティ称揚が「自己決定」や「独立論」として出てきて流通するあり方に関してですが、社会的な慣習のなかでは、ウチナーンチュ／ナイチャーという区別は非常に普及していると思うんです。例えば、ファストフード店の中で若者たちの会話の中で、どこどこの誰々は「ナイチャーじゃないか？」と話題にしたり、病院の中で看護師に対して突然年配の人が「あんたナイチャーね？」と聞いたりとか。だが、それ以上いかない。慣習的に分離はするが、それだけではすぐに政治参加の資格をめぐる問題に行くわけではない。「独立論」の人たちは、それに対するいらだちがあるんじゃないでしょうか。なんでもっと分離しないかっていう。

　社会的にはウチナーンチュ／ナイチャーという分断は非常に普及していると思うんです。だけれども職場や学校では共在している。「独立論」は、それが許せないのかなって。「非琉球人」を研究している者からすれば、「米軍要員」と「琉球住民」と「非琉球人」というのが米国統治期にあって、当然「米軍要員」は何も変わっていないですから、一九七二年の施政権返還で「琉球住民」と「非琉球人」という分離が、日本国民としての沖縄県民と日本国籍を持たない者としての沖縄にいる非日本国籍者というふうに、その市民権のラインがかわっただけなんですよ。今の「独立論」で彼らが言うところの「琉球人」の定義づけを目指して、政治参加をそれに限定しようとするあり方は、本人たちは自覚していないとしても、要は「米軍要員」と住民が分離されているあり方、その構成や歴史性を問わず、また一方で現在日本国籍をもたない人が市民権がないことも問わずに、「琉球住民」から「日本国民」という形で基地と分離された住民社会の市民権の主体が変化して拡大した現状に対して、憤りを感じているように感じるんです。それをダイレクトに日本政府や「本土」社会と沖縄との関係に直結させ、在沖縄で「ナイチャー」と呼ばれうる人がどういうふうに生きてきたかを全く問わずに、排外しているんじゃないかと思います。要するに「独立論」は、在沖縄の人びとの分離されるあり方に着目すれば、「市民権のラインを引き直せ」と言っている様に感じる。そして、社会的な慣習のなかでいろいろな分離のあり方があるにもかかわらず、在沖の「ナイチャー」と呼ばれる人が市民権を持っていることに対して大半の人がそんなに怒っていないことに対する憤りもあるんじゃないかという気もするんです。

徳田　最近の反国家論、独立論が出てくるときに、対抗的に措定されている国家と言うのは、超越的で我々を虐げるものとして想定されていて、そのような国家からの分離として私たちの主体性を対抗的に立ち上げるというところで、戦略的本質主義が許

され、自分たちの国家を持つことが夢想されている。その中身は国家の王権的な部分、頭の部分を「我々」に置き換えれば万事うまくいくとおもっている。しかし国家と「我々」という意味での市民社会の関係はもっと複雑だと思います。国家と市民社会というのは、対置はされるけれど、それを通じて管理と統治は機能していくという面もあるわけです。例えば、徴兵拒否は昔からあって、いざとなれば逃げればいいなんて思っている人は大量にいた。けれども市民社会ができてきて、市民社会自体が自己の責任として国家と同一化してしまうと、徴兵を拒否すること自体が悪になっていく。徴兵拒否は一般的な現象だけれども、それが法律に違反するかどうかではなく、倫理、道徳の問題として立ち現れるというのは、市民社会の成立とともにだとフーコーは指摘しています（『安全・領土・人口』高桑和巳訳、筑摩書房、二〇〇七）。つまり、「我々」や「市民社会」という同一性を想定していくとき、非常に国家の統治と親和性が高いということも考えないといけない。国家は諸個人を集団化したり人種化したりすることを通じて暴力を振るうので、その国家を批判しなくてはいけない。しかしその批判の仕方が強圧的な実践に対してだけだと、ジェンダーやセクシュアリティの規範は温存されるし、国家に対置するわれわれを作り出すための家父長制がまた必要になってくる。実は国家に敵対しているつもりでも、全く同じ構造を追認することになる。そういうところで、土井さんが述べたように琉球住民と非琉球人という区分が、外から来たものとして組み替えられていってしまう。日本国家と沖縄の対立という一見すると反権力なんだけど、実際は住民の人種化と分割統治をもう一度繰り返すということでしかない。独立や反国家というだけでは反国家的でないということも含めた言論が必要なのではないかと思います。

成定　反国家論が反国家的でないということは、自治体、警察、市民団体、大学生などが一緒になって、歓楽街の浄化活動を法の名の下に行っていく際にも、特徴的なことであるように思います。徳田さんがおっしゃっていたように、布令だけではなく、自分たち自身が良くなっていきたいと思う欲望を一緒に見ていかないといけない。反国家的な対立した形としてのみ捉えるのではなく、もっと巧妙に、あるいはもっと入り組んだ形で私たちがそのなかで生きているということを見出していくことが必要。また、ネイティブエリートを使う非現地の人たちがいるというお話をされていましたが、そこをグラデーションで捉えるとどうなるのかということも見ていきたいと思っています。

井上　もちろん、構造のなかの効果として特殊が求められてしまうときに、そうした呼びかけに応じることを選択する人たちのいわゆる心中には様々な感情が潜んでいることはもちろんですし、その度合や陰影は社会空間に生きる人間であれば誰でももたざるを得ないと思います。ですが「代表者・表象者」たちのネットワークが要求する主体性が、こうした様々な感情の表出を阻害してしまうことも確かでしょう。そして強いられた主体性が時間の経過とともに自然化される際には、アルチュセールが内在的因果体として定式化したように、構造がその効果においてのみ現れる際の諸カテ

ゴリーが、構造に時間的に先行する原因・基体として取り違えられてしまうことがあると思います。

したがって「特殊」を演じることで制度的資源の分配にありつこうという人々に出会ったら、その人達が政府や文科省の意向を気にせずに批判的なプロジェクトをどんどん行っているかどうかを見ておかなくてはいけないと思います。このとき同時に重要なことは、こうしたゲトー化された配分の媒介役としてのネイティブ従属主体として労働してしまう知識人たちとの、良い意味での敵対性も大事にするということかな、とも思います。もちろん、この敵対性そのものが目的というよりも、敵対せざるをえない状態に人々を留め置く知のあり方そのものをいくらかでも変形させたい、ということがあります。こうした構造の変形を模索する際に、昨今の英語圏の一部で頻出するインター・セクショナリティ（相互交差性）といった言葉が、ジェンダー、レイス、ナショナリティ、階級などの相互規定性、相互嵌入性、相互的不可分性を充分に見ることをせずに、各項目をまずは分離した上で、それらの交差点を探っているだけのような気もしてしまいます。諸「特殊性」の交差点としてインター・セクショナリティティを見るならば、結局は各「セクション」における有徴化の度合いを計算可能とした上で、それを国民国家による承認と配分の対象として物象化することに繋がるのではないでしょうか。「セクション」といった言葉で「交差」に先行する領域が想像するのではなく、各項の「重層決定」のされ方と、そこからの抜け道を模索すべきと考えるのです。

とはいえ、司会がしゃべりすぎているようです。やはり引き続き、成定さんのおっしゃるグラデーションというものの意義などをもう少しお聞きしてみたい気がします。

成定　沖縄でネイティブエリートといわれる人たちと非現地にいるネイティブではないエリートと言われる人たちが対置されがちな状況について考える、或いは、二分してカテゴリー化する過程でこぼれ落ちてしまうかもしれないことを見ていくことができないかと思っています。同じような言説を用いていてもそのグループのなかにもいろいろな差異があるかもしれない。例えば、日本人の植民地責任を糾弾したいということがあったとしても、それぞれの関心とか方法論とか経験とかから違うように見えてくるということも実際あるのではないか。繋がりもみるけど、差異も見ていくことによって、カテゴリー自体やカテゴリー同士の関係性を疑問に付すことができるのではないかと。

井上　そういった一見親密な繋がりとも見える関係における差異と、転移的な共生産としての諸カテゴリー同士の相互依存的な形象、承認、馴れ合い、対＝形象化などをどう考えたら良いのでしょう。

土井　例えば、仲里効氏は沖縄の「ネイティヴ」として自己画定しているように見えるが、彼自身が排外的な発言をしないとしても、解説する側にたつんですよ。いつも沖縄社会の国民主義的な言論を肯定的に読解する。彼自身は「沖縄」と自己画定しないでパターナリスティックな態度をとる人とまったく同じで、要はネイティブ／非ネイティブという区分というよりも、ある物事を論証しようとするときに、対―形象的、

転移的な欲望として、相手の欲望を先取りして説明してしまう。この欲望の起源はどこから来るのか分からない、というか人との関係のなか、循環のなかでこうした欲望の配置とともに差異化されたり、階層化されて主体が編制されることがポイントかと思います。だが、それは常にナショナリティの差異の配置となるかは分からない。それこそ体験のみを語り、「沖縄」と自己画定する人、近年の佐藤優氏のように体験を解説しつつ「沖縄」として自己画定する人、高橋哲哉氏のように体験を読み「本土」と自己画定する人、自身は特定のナショナリティに自己画定しないけれど「沖縄」の国民主義を肯定し解説する人というようないろいろなパターンがあると思うんです。物事を論証したり提示しようとするときに、役割分担ができあがっている。しかし、それが常にナショナリティの差異の配置かどうかは分からない。

井上　仲里氏であれ、冨山氏であれ、高橋氏であれ、沖縄をめぐる傷を感受していることはそうだと思います。しかし――偶然か必然か分かりませんが、それぞれのナショナリティにおける男性的規範主体であることを引き受けるような――これらの人たちには、傷が自我にとって根源的に外のものであるという事実と、この自画像の外から到来する傷の感覚が、自画像の皮膚や枠といった縁取りそのものを揺らすままに留まる、という事実からの撤退があるように思います。つまり植民地主義の暴力の傷や痕跡が主体の枠を刻むだけでなく、その枠の輪郭そのものを問に付し、震わせてしまう記憶をも内包するのであれば、こうした傷が到来するときの痛みの中には、こうした痛みをもたらす構造や図式を批判せよ、それを分析し、今後反復されないようにせよ、という感性的かつ倫理的な要請が含まれているとも思います。こうした傷は、主体が自画像を構想する際に感じる揺らぎであり、そういった震えは、感性と悟性、受動性と能動性とをつなぐ中間的な能力であるはずの構想力・想像力にとっての深淵であり、謎のものであり、未知のものを含むかぎりにおいて、今の知のあり方を変形させるような感性的な出来事ではないでしょうか。米山リサさんなどは、過去の苦しみのイメージが、過去と現在双方の認識図式にとって決定的に外在的であり、過去の現在と現在の現在の言説空間においていかなる道具化をも拒む「凍てついたイメージ」であることをベンヤミンの「静止した弁証法」のロジックにも依拠しながら強調されていました。しかし、仲里氏、冨山氏、高橋氏は、こうした傷の深淵、過去の苦しみの「凍てついた」イメージが内包する根源的批判から撤退することで、それをいかにして現行の主体図式を構想させている枠の中で計量化し、配分し、現実主義やそれが内包する資源や犠牲の移譲といった議論への撤退、後退、退却を許してしまっています。ですが、繰り返しますが、傷とはこうした支配と従属を再生産する図式世界そのものを変革せよ、という過去からの要請のインデックスではないでしょうか。

　またカナダ出身でドゥルーズ＝ガタリの仕事の英語圏への紹介者でもあるブライアン・マッスミはドゥルーズの情動（アフェクト）概念を感情（エモーション）概念と区分する際に、前者は主体の枠内へと侵入し、その枠内に襞やポケットのようにして

外の力をもたらすもので、後者は前者を既存の表象体制内での諸主体の所有物へと縮減したものだとまずは分かりやすく整理しています。すると仲里氏、冨山氏、高橋氏などはマッスミが批判するような「感情」を見てはいるが「情動」は実は見ていないと言えるのではないでしょうか。つまりは、痛みをまずは「沖縄」なる領土的フォームに閉じ込めた上で、それをその土地の代表として振る舞うことを選択する「プロパー」な人間の「プロパティー」として「感情」化することで、非現地の「プロパー」な人間としての自分の「プロパティー」としての感傷的な感情を是認しているのではないでしょうか。どちら側も、痛みの経験が我有化不能であるのに私（たち）を揺さぶっており、その痛みをもたらした社会構成や世界図式を批判するように、との期待を届けていることを看過してしまっています。

これは例えば新城郁夫氏が目取真俊氏の沖縄戦をめぐる小説作品を読み込むなかで、死を強いられた人々や後続の人々においての痛みの感覚が、彼ら・彼女らにとっても外からの力であることを読み取ろうとしたこととは、大きな違いがあると思います。もちろん「感情」にとって過剰であるものとしての「情動」なるものを、政治的あるいはジェンダー的に保守的とされるような人のテクストから感知する作業は大事でしょう。ですが、テクストにおける情動へのこだわりを、テクストの筆者自身への間主観的な感情に依拠した寄り添いや馴れ合いへと転化させることには大きな問題がつきまといます。私はこうしたテクストとその筆者とを無批判に混同する手法からも距離を取り続けたいところです。テクストを書いた人が実際の制度内で引き受けている主体性や行使している権力との距離感を失ってしまいかねないからです。

三　「過去」と「現在」を横断する批判と抵抗の可能性

土井　主義という言葉の問題ですが、それで見えにくくなることはあると思うと同時に、逆に言えば、全然違う立場で同じことを目的としなくても、一定の排外はできるというか、結局誰を排外しているのか分からない、どこからどこまでがする側かされる側かも分からないけれど、「帰れ」だの「仕事を奪う」という暴力的な言動だけは垂れ流せる。これは今の沖縄をめぐる言論や、沖縄を含む「日本」だけじゃないと思うんです……。傷の話が出ましたがそこで思うのは、傷つけた経験というのはなかなか思い出せない。もちろん傷ついた経験の言語化も表象不可能性の議論があるように容易なことでは絶対にありませんが、傷つけた経験に関しては思考の課題として意識化することさえも難しいのではないか。例えば、アメリカが、というよりも今の帝国的な権力の体制が、沖縄で生きている人の具体的な人間関係のなかでの傷、罵りあいとかも含めた傷を一体どうやって感知するのか。沖縄にいる人間でさえこんなに難しいのに。また、排外する人の多様性と同時に、やはりされている側の多様性というのも見えにくい。「排外主義」という括りへの違和の議論をさらに進めて、逆に言ったら排外された人も一括りには絶対できない。当然社会の中で同じ名称で排除された経験

があるからといって、それだけで葛藤を共有できるわけでもない。抵抗のくだりで思ったのは、僕の研究で資料を見ていても、なかなか抵抗というテーマが出てこないんですよね。なんでかなという気はしているんですが、一つは米国統治期の「非琉球人」に関する資料を見ているとやはり運動がないということが挙げられるかと思います。僕が確認できたなかでは、それこそ限られた代表者たちによる陳情しかなかったんです。どういうことかと言うと、奄美返還前からいる在沖の奄美の人を無条件で琉球籍にしてくれという事実上の「帰化」を要求する陳情だけがあって、そこには大衆がいない。沖縄にいる奄美の人に聞いても「そんなことがあったの」という感じで、陳情の存在をご存知の方にまだお会いすることができていなくて……。抵抗というのはやはり見えにくい。

徳田　本人たちも覚えてないというのは？

土井　署名活動や陳情があったことを覚えていない。復帰運動というのがあったことは、当時の沖縄で生きていたら、運動への参加・不参加にかかわらず皆さんまず覚えていると思うんです。しかし、在沖奄美会の中心人物である泉有平（琉球政府の初代副主席、奄美返還後に公職追放）という人が琉球籍をくれと繰り返し陳情していたことを、僕は資料で見て知っているけれども、実際「非琉球人」とされていた奄美出身の方たちに聞いても覚えていない。大衆性がないんです。

徳田　それは大衆性がないのか、それとも単に問題の所在としての認識がその人自身にないのか。

土井　問題の所在は感じているとは思うのですが……、ただ思うのは、指紋押捺に関しても経験者に聞いているんですけども、覚えている人と覚えていない人がいて、ある人にとっては忘れられない人権侵害だったと言えるんですけど、一方であったかどうか覚えてない人がいる。

徳田　それってもう、押すのは当たり前だみたいな？　それくらいなら構わないだろうということはあったのか。

土井　そういう可能性もあるかと思います。それこそ徳田さんが事後的なことから見直す必要性に言及されていたと思うんですが、在沖奄美の人に関して言ったら指紋が大きく取りあげられたのは一九八〇年代以降だと思っています。そんなに資料があるわけではないので比較は難しいんですけど、施政権返還前後に出てきた資料では、選挙権がなかったとか、育英会や融資が受けられなかったとか、そういうことを言うんですね。それがやはり一九八〇年代に日本国内で在日の朝鮮や中国の人とか、あるいはアメリカの人も含めて、「外国人」とされた人々の指紋押捺拒否闘争を受けて、あれは問題だったんじゃないかということが、「非琉球人」経験者の中で一定以上広がった結果、「自分たちも指紋を押すほど苦労したんだ」ということが出てきたのかなという気がしていて。そのときになかなか抵抗と言うのは見えないんですよね。

徳田　沖縄の優生保護法にしても、人口妊娠中絶に関しては議論や運動があるけれども、こと優生学に関しては誰も問題にしてこなかった。それはまずいわけです。強制避妊手術を命じる法によって直接被害を受ける人がいるのにその法が何の議論もなされず通るときに発動している統治の権力が

ある。こういう人口管理を問題にするためには、法が通ってしまうことによって、インビジブルだけれどもビジブルになるような人たちとともに、異議申し立てをしないといけない。それは国家に対してだけでなく、その社会に対して声をあげないといけない。問題化されてこかなかったことも含めて、沖縄社会を批判していくということを今の段階でしていく必要がある。今起きている問題について、例えば独立論などが出てきている状況で、戦略的本質主義だからと認めてしまって、五十年後に「当時の状況はこうだから仕方がない」というのはよくない。当時批判がなかったことに対する徹底的な批判は、今を批判するためには非常に有効だと思います。

成定　それは土井さんの研究を見ていても思います。

徳田　当時はしょうがなかったと言ってしまうのはよくない。

成定　今同様、当時の沖縄社会を無批判に美化したり、免罪してしまうのは違うと思います。

徳田　それを覆すことによって今を取り戻せるはずで。

土井　当時は仕方がないという議論は今あきらめろと言っていることと同じに聞こえる。歴史を学ぶことが現在において切実になるのは、その当時の状況や限界を静態的に再現して固定することではなく、ある種の排除を現動化させる諸力の特定の結合状況を、その現在性において見るときではないでしょうか？

徳田　そうそうそう。それを否定するには当時を当時のまま批判する作業が必要だと思います。

井上　当時を当時のままというのは？

徳田　異議申し立てがないことがまさに沖縄社会の問題だったと批判する必要がある。寄り添うのではなく。それが現在にコミットする上で大切なのではないかと思います。例えば、松島泰勝さんは、琉球独立学会におけるジェンダーやセクシュアリティといった視座の欠如を批判する新城郁夫さん（『けーし風』No. 80、二〇一三年一〇月）に対して、それは新城さん個人の価値観だと言ってしまう（『うるまネシア』No. 17、二〇一四年一月）。ほとんど国家統治について無知なわけです。このような状況に対処していくためには、寄り添うのではなく徹底して批判をしていかないといけないと思います。

　冨山一郎さんなんかは昔はしょうがなかったと言えるから今もしょうがないと言えるわけで。昔の人だって蘇鉄地獄で苦しん

でいるから、そういうことがあってもしょうがないと言う。でもそうじゃないだろと。だめじゃん。

成定　徳田さんの原発の論文でもそうでしたよね、今を問うという形で結びつけておられていて。

土井　過去に対する批判を拒否する人は、過去と現在と、あるいはコンフリクトのある場所と読解する場所の分離を前提にしている。これは特定の人だけの問題じゃなくて、沖縄に生きている人間も同じことができるわけで。

成定　多分それは過去だけじゃなくて、差別されている構造と、称揚するところとの分離はなされるのだけれども、同じくそこを問うていくこととつながると思います。

土井　沖縄社会のなかで生きる葛藤、対日本政府、対米国ではなくて、この沖縄の市民社会のなかで生きることの恐怖はなかなか語りにくい。いろいろな正当化の手段があって、徴兵拒否を道徳的悪と言うような……。僕が感じていたのは、沖縄社会への違和感を表明したら日本政府を許すのかとか、あるいは戦前の差別を許すのかという、二者択一を踏まされている感じがして。それは多分自分のことを沖縄の人間だと思っている人も同じで。自分が思うのは、沖縄なるものを問うときに、フーコーのいう「数々の国家化」が重要になるということ。例えば今の国連に登録された国民国家というのは、数は多いし占める面積の割合も多いけれど、ある種の歴史的な条件において多数を占めるに過ぎなくて。

徳田　そう。数々の国家化の諸形式のうちの一つだと思います。

土井　数が多いということと、国家化を一つの形象に限定して考えることは違う。

徳田　国家化のなかでの相互承認という形式の一つとしてはあるけれど、それ以外にも。

土井　米国統治期の「琉球列島」はやはりどう考えても国家化の作用を受けていて。

徳田　管理もそうですし、放置する、自由を謳うとかも国家化に入ってくるはずです。

土井　新川さんの『反国家の兇区』とかも、対日本政府とか、対米国への批判をするなかで（米国批判は少し弱いけれども）、あたかも米国統治期の沖縄が日本国内にあるかのような議論をしていて。それだから受けるんじゃないかと。安保闘争以降の「日帝自立論」のような米国と日本との不平等だが等価的である対―形象的な国家の共生産と、基地と住民社会との分離の自然化が流布し、米国の帝国的な覇権構造の中で再構成された戦後日本の「国内」領域を自明視する言論空間において、「反国家」が「反ヤマトゥ」に収斂する議論は受容しやすかったのではないか？

徳田　と同時に、抜け落ちてしまうのは、身体の規律化や人口管理などの問題ですよね。そうした諸々の実践の効果として現れるものとして国家を捉えられていたのか。

土井　沖縄社会で感じる恐怖の問題、あるいは「マイノリティ」の問題、その葛藤や困難というものについても、それらがメディアとつながるときの枠組みの問題あって。いわゆる「外国人」問題はなかなかメディアに載らない。インビジブル／ビジブルの話をされていましたが、記憶に新しいのは、昨年（二〇一三年）、米兵の夫に一方的に結婚無効の手続きをとられ、日米地位協定上の米軍関係者の地位を失い、入管那覇支

局から「国外退去処分」を命ぜられたフィリピン国籍の母子の処分取り消しを求める訴訟問題があったのですが、彼女たちが法の網にひっかかり強制送還されるときになって、初めてメディアにつながる。しかし、その後、継続して報道されることがなく、その成り行きがわからない。この場で合法的に生きられなくなって、ようやくメディアで顕在化してくる。そういう形でしかつながれない人がいるということを感じました（この件については、二〇一五年一月に那覇地裁で母子の請求が却下され、女性側が控訴する方針と報道されている）。フーコーの統治性の議論で印象に残っているのは、人口の二様の水準というところで、ある権力的な枠のなかで人口として、適切な水準として設置される領域と、それ以外の個々人の群れの領域に峻別され後者は放置されるという話です。ある集合性に対して人口の獲得を通じた統治という目標が設定された場合、人口という適切な水準と、人口の獲得にとって不適切な群れの水準が作られる。これは基地空間においても言えることでしょう。軍人たりうる人と、軍人として失格な人という区別。軍と住民との分離と、基地と住民という異なる経済圏双方の集合性における人口の問題が、互に絡まりあいながら分離しつつ作られる。フーコーは『生政治の誕生』のなかで、国家について、ある一つの国家の本質があってそれが伝播していくというモデルではなくて、先ほども話題にした「数々の国家化」という表現で説明しています。僕の理解では、「国家の統治性化」という流れの中で、何を行うのか（僕の場合なら、「外国人」管理となりますが）という局面に焦点を当てて、国家をその形式よりも遂行的な側面を重視して分析する方法なのだと思います。米国統治期の「琉球列島」は、国連に承認されたいわゆる国民国家ではないとしても、「非琉球人」に対する管理制度のあり方を見ていくと、まさに「数々の国家化」の一つとして分析せざるを得ない。そのときに市民社会を通じた囲い込みというか、「自発的」なまとめあげというような事態も起きてくる。そこにはハンセン病の事例や優生学の議論はもちろん絡んでくるし、同時に家族の再編を通じたジェンダーの問題や、異性愛主義の再編が推進される。その辺りを見ないで私たちが「沖縄社会」と言うときに、単に沖縄県という施政領域があってそこに人が存在するから「沖縄の社会だ」として、人の群れに対する統御と「数々の国家化」としての空間編制との関係において浮上する諸力の結節点としての社会が、沖縄という特定の条件において現働するあり方を問わないならば、人々が米軍との分離といった力関係のなかでどのように編制・配置されてきたのかを問えなくなります。具体的な権力の場としての沖縄社会が歴史的にどう変遷していったかを見ていく必要がある。日本の言論における国家の本質主義的理解では国連に登録されていなければ国家批判から外してもよいといった風潮があるが、そのことは沖縄社会で生きることをきついと感じている人々も内面化している。徴兵拒否の話にも関係しますが、社会批判に対して共同体あるいは市民社会に対する道徳的な悪を感じることに、沖縄に生きている人や生きていなくとも沖縄を語ろうとする人たちも巻き込まれてしまっている。沖縄を語ることの正統性がそこで

は問われだして、非常に危ういと思います。沖縄社会をどう批判し分析するのかという枠組みを再考しないと、沖縄社会で生きることの葛藤を語る場所がなくなってしまいます。

成定　皆さんに聞いてみたかったものは、井上さんが提示してくださったように、沖縄をめぐる表象や感性の図式化から逃れていくテクスト、運動、作品などを感知する際に、理論的枠組みはどう変化していくのかということについてです。もう一度理論的枠組みを問い直し見出していくことはたしかに難しいですが、私自身は手垢にまみれたような抵抗や本質主義や構築主義といった言葉を考え直し、関係性も含めてつないでいく場が作っていくことが必要だと感じています。

徳田　僕は銚平名智太郎の本を読んだときに、この本の理論の縦軸と横軸を解きほぐして批判できれば、現在に対する批判を理論的に実証できると思いました。自分の立ち位置とは真逆にいる側から立てられた論理構成を読んだときに、逆に自分のやりたいことの批判の矛先が非常に明確化されました。あるテクストに理論的に取り組むこと自体が非常に闘争的であることを直感しています。

土井　僕が実証による理論的な「現在に対する批判」ということで思い出すのは、二〇〇〇年代中盤の二つの新聞報道です。一つは、「移住者」への排外がメディア上で大きくなっていた二〇〇五年に八重山毎日新聞で読んだ鹿児島系の沖縄出身者が、戦後に「非琉球人」として石垣島で経験した指紋押捺について語っていた記事です。もう一つは二〇〇七年に沖縄タイムスに掲載された読者投稿で、「ヤマトゥンチュ」とされる「移住者」へのバッシングが堂々と行われていたこと。生活保護を受給して帰省したり、インフラ整備の問題を行政に注文することが問題視され、「平和な島を守るために不良移住者を追放せよ」とまで書いていた。これらの記事に出会い、二〇〇〇年代にメディア上で特に普及した、「移住者」、在沖の「ナイチャー」とされる人々への排外は、「外国人」問題としての「非琉球人」問題の歴史性において捉えねばならないと感じました。そうすることで、「外国人」とされる人が沖縄に生きることを問題視されるべきでないのと同様、市民権があるか否かという法的地位とは別に、「ナイチャー」とされる人が沖縄で合法的に生きていいことを証明できるんじゃないかと思った記憶があります。いや、違いますね。今だからこう思うのでしょうが、合法化というより、あるカテゴリー化において不特定多数の人びとが沖縄で生きることそれ自体が非合法または非規範的なこととして周縁化されていく現状を批判的に捉えることが、沖縄の困難に抗うことと対立することでは決してなく、より具体的に批判をなすことにつながると考えたからかもしれません。その頃は、まだ指紋押捺を「当然だ」という「左派」など、いるわけがないと微かな希望があったのでしょう。ここ十数年の沖縄を含む「日本」の言論を見ると、それはあまりに甘い展望であったことを痛感させられるわけですが。ところで、僕は日本国籍の「非琉球人」を主軸として研究していますが、「非琉球人になる」というテーマとは別の形で取り組みたいと考えています。「非琉球人」の経験に同一化

するのではなく、別の視点で見ることが大事だと思います。それは研究対象を批判的に見ること――それは、罵倒したり、出入管理令によって「外国人」化されたことの原因を当事者に帰すようなことではなくて――とも関わります。一九六八年に日本国籍の「非琉球人」にも一部を除き参政権が与えられ、返還によって完全に市民権の主体に統合されるその過程で、ペ・ポンギさんのように戦前も戦後も復帰後の現在も市民権のない人々の存在が忘却されていく――米軍とすべての住民との分離は継続しますが――。このような分離をどう考えるかが、研究者だけでなく僕の対象とする「非琉球人」経験者も問われているのではないでしょうか。この分離がどのように歴史的に構成されたのかを問い直すことが、現状への批判になるのではないかと今は考えています。あと、この機会にもう一つ話しておきたいことは、先日国連で沖縄選出の国会議員の糸数慶子さんが紅型を着て登場した際の写真が沖縄の新聞の一面に載っていましたが、糸数さんやほかの地域からの参加者の前にあったプラカードには名前や地域名さえなく、ただ“Indigenous Peoples”って書かれていて、これは参加者を馬鹿にしているのかって思いました。たしかに現在では“Indigenous Peoples”という語彙はポリティカル・コレクトネスを通過した「普遍」的な言葉なのかもしれない。でも僕が米軍やUSCAR関係資料を見ている限りでは、indigenousというのは軍と分離された沖縄の住民に頻繁に使われていた言葉です。このときのネイティビズムとは、アルカイックなものを復興しようとするものだけではない。Manu Goswamiの*Producing India: From Colonial Economy to National Space* (2004) という本では、近年のインドでのムスリムを他者化する暴力的なヒンドゥー主義に言及されていますが、それを歴史的にたどるとイギリス植民地期の帝国主義とナショナリズム、ネイティビズムの連関が見えてきます。彼女によれば、個別のナショナリズムはインペリアル・エコノミー（帝国的経済圏）の構成との関係においてのみ、相互に立ち上がるものだとしています。インドのみならず、英本国それ自体もインペリアル・エコノミーの変数として再編されていくものだと。彼女曰く、テリトリアル・ネイティビズムの特徴とは、それが帝国的経済圏との関係性においてのみあることを忘れて、あたかも一体的なインドなるものを非歴史的に自然視することだと述べています。これは沖縄のみならず全国規模で流通する日本の言論においても当てはまることだと僕は思っていて、近代以降の大日本帝国が崩壊した後もアメリカの帝国的な範囲のなかに収まっていながら、日本の言論は批判的に日本に言及するときでも「プロパー日本」なるものを想定している気がします。沖縄だけがネイティビズムを称揚しているのではなく、日本の言論自体がネイティビズムそのものだと言える。

徳田　同意します。

成定　抵抗概念を再考することが沖縄の女性をめぐる研究に関しては必要だと思います。男性中心主義社会を克服すれば自由になる、そしてそれが抵抗につながるといった議論について、もう一度個別の事例を見ていくことを通して再考したい。歓楽街が浄化される際の言説を見ていくと、言説の

統一化と同時に個別的な差異化も見えてくる。また個においても矛盾した言説を共存させている場合がある。自らを被害者として表象しながら一方ではいや労働者だと主張するようなことが同一人物の言説のなかで起きている。個人の中に多重な言説が内包されつつ主体化＝従属化されていく事態を丁寧に見ていくことで、抵抗だけを焦点化するのではなく、いわゆる「沖縄の女性」を代表できない人々の間に問題と同時に、表象の政治に関わる可能性を見い出すことができるかもしれないと考えています。

井上　警察が「浄化」ではなく「転勤」といった意味での吉原への移動だと説明し、そのロジックを宜野湾の人たちが使っていくときには、図らずもこの移動は彼女らの自由意思ではなく普通の労働者のように移動を強いられているという含意が出てくる、とも論考で書かれていました。それは抵抗ではないかもしれないけれども、そこに「共感の萌芽」のようなものがあると考えていらっしゃいますか？

成定　新町で働いていた人々が吉原に移動していくことを語る文脈に「共感の萌芽」を見ることは難しいように思われましたが、浄化する側によって「共感の萌芽」のようなものが語られるのは、自分たちが共に「女性である」ということを確認しつつ、浄化される側を「被害者」として見ている場合が多かったように思います。その背景や前提には、普天間基地と歓楽街の「被害者」としての「女性像」がイメージされている。このことを、ジェンダー本質主義的な沖縄研究の傾向とともに考えていくことが必要であると考えています。

井上　今日はお三方の今後の研究の展望についても有益なお話しを聞くことができました。最後は私も若干私見を述べてしまいましたが、今日集った四名の考察と関心が必ずしも完全に重なっているわけではありませんから、一致していない部分や研究途上の部分があることをも大事にしていければと思います。もちろん今後も実証的カテゴリーを研究が依拠する土台とするのではなく歴史化すること、さらにはこれら実証的カテゴリーが基体化されたときに隠蔽されてしまう歴史的経験があり、その経験が内包する様々な傷があること、そのようなことを今後とも考え続けていければと思います。本日はみなさん長い間ありがとうございました。